

●「おもちゃ」と人とのかわり

おもちゃの究極—“白無垢の球”

～子どもの発達に資する「マルチおもちゃ」の開発をめぐる～

筑波大学 監事・お茶の水女子大学 名誉教授 内田 伸子

● はじめに

おもちゃの究極は白無垢の球であると考えています。目に見えるものは白無垢のボール状のモノですが、それに、動きや形や色、そして働きを与えるのは子どもの想像力なのです。おもちゃはうまく使えば子どもの想像力を育ててくれます。何よりもおもちゃは子どもの遊びを豊かにしてくれる小道具です。親子のコミュニケーションを活発にしてくれる小道具にもなります。筆者は、発達心理学の視点から、子どもの創造的想像力を育み、親子のコミュニケーションの活発化に役立つテレビ番組やおもちゃの開発に携わってきました。

① 子どもが好きなだけ遊べる時間の大切さ

「経済格差は学力格差をつくりだす」という言説がまかり通っています。この言説は正しいのでしょうか？経済格差のもとで、親子のコミュニケーションはどのような違いがあり、将来の学力にどのような影響をもつかを明らかにしたいと考え、日本（東京）・韓国（ソウル）・中国（上海）・ベトナム（ハノイ）・モンゴル（ウランバートル）の幼児3歳児1,000名、4歳児1,000名、5歳児1,000名を個人面接して、リテラシー（読み

書き・識字力）や語彙力を調査し、子どもの親と担任の保育者（幼稚園教師や保育所保育士）全員にアンケート調査とインタビュー調査を行いました。家庭環境や世帯収入、親のしつけや保育形態（一斉保育か子ども中心の保育か）が、子どものリテラシー習得に影響しているかを調べてみました。

その子どもたちが小学校に入り、1年生の3学期に学力テストを受けました。幼児期に受けたしつけや保育が小学校の学力テストの成績とどのような関係があるかを調べてみました。すると、親のトップダウンの「強制型しつけ」を受けた子どもに比べて、親子の触れ合いを大事にして子どもと楽しい経験を共有する「共有型しつけ」を受けた子どもの語彙が豊かで、学力テストの成績も高くなることが明らかになりました。子どもの遊びを大事にする保育、つまり「子ども中心の保育」を受けた子どもは、一斉保育で文字や計算など小学校の準備教育を受けた幼稚園に通った子どもよりも小学校での学力テストの成績が高くなることもわかりました¹⁾。

幼児期に、子どもの主体性が大事にされ、遊びの中で探索の喜びを味わった子どもの方が伸びるという結果は、昨今、子どもを早期教育に駆り立てる親たちにぜひ知っていただきたいと思

います。子どもの遊びに彩を添えるものとして映像やおもちゃがあります。

② 低年齢幼児向けテレビ番組の制作

1980年代には、NHKの幼児番組「おかあさんといっしょ」の番組開発に携わりました。きっかけは幼児期のテレビ視聴の実態調査²⁾で、幼児初期（1歳半～2歳頃）の子どものテレビ視聴時間が一日平均3時間、マンションの高層階に住む2歳児は4時間もテレビを視聴しているという実態が明らかになりました。当時は文字や数、工作などを題材にした就学前の子どもの幼児番組はありましたが、低年齢向けの番組はありませんでした。私たちが調査してみると、低年齢の子どもは就学前児対象の幼児番組や大人の観ている番組を観ていることがわかりました。低年齢児の子どもの視聴スタイルを調べたところ、1～2歳児は、大きな音がしたときだけ画面を観て、あとは手元

のおもちゃで遊んでいるという見方でした。騒がしい映像演出では2歳児の目はついていけないし、理解もしていません。ナレーションの背景にバック音が流されていると、耳の感度が鈍くなり、声への感性が失われてしまうことも明らかになりました。多くの番組は、低年齢児の視聴能力を超えていて、子どもが理解せずに音や光に曝されているという実態が明らかになりました³⁾。これはたいへんということで、発達心理学や教育工学の研究者、絵本やおもちゃの会社、NHKの幼児番組製作者が集まって、子どもが理解できるようなシンプルな演出の2歳児向け番組開発を行うことになりました。2歳向け体操番組としてヨガの動きを取り入れた『ハイ、ポーズ』や生活習慣自立を助けるための『パジャマでおじゃま』、12人の登場人物のキャラクターを際立たせることで、国際理解教育を目指した番組の『こんなこいるかな』（図1）が開発されました。子どもの発達にとってよりよい番組を制作するという経験は、その後の幼児のためのビデオゲームやおもちゃの開発、絵本の監修などに携わるときの土台になりました。



図1 「おかあさんといっしょ」で放映されていた「こんなこいるかな」

③ 子ども文化を創る活動： 学問知を臨床知に架橋する取組 —マルチおもちゃの開発

◆なぜくごどもちゃれんじ>の開発に関わることになったか

3歳未満の教育商品が日本にはまだ

確固としたものがなかった時代に、ベネッセとともに制作しようと1993年から発達理論に基づいた商品開発に携わるようになりました。そのきっかけは、1989年にベネッセ（当時福武書店）の編集者M氏が研究室を訪ねてこられ、就学前児のための教材「子どもチャレンジ」を2歳代にまで前倒した「低年齢児向け教材」を開発するのを手伝ってもらえないかと相談されたことからでした。

筆者は、ドリルや文字カードを使っ
ての「知識詰め込み型早期教育は百害あって一利なし」という立場をとっていますから、2歳児向けに「教材」を開発するなどとんでもないことと即お断りしました。ところが、M氏は「三顧の礼」をつくし、三度も大学を訪ねて来られました。その熱心さにほだされて、とうとう三度目には、「8つの条件をクリアしていただけるならお引き受けしてもよい」と伝えました。8つの条件とは次のようなものです。

④ 監修を引き受ける8つの前提条件

①開発のキーコンセプト；

発達心理学や脳科学の知見に基づき、子どものこころ・からだ・あた
まの発達に資する「マルチおもちゃ」
（教材ではなく、あくまでおもちゃの
開発を狙う。＜仕掛け絵本＞と＜お
もちゃ＞と＜ビデオ＞が三位一体に
なるよう内容を連動・連携させたお
もちゃを「マルチおもちゃ」と呼ぶ

ことにした）を開発すること。

②しまじろうパペット；

子どもは親子の会話や遊びを通して世界づくり、地図づくりをする時期なので、母子の会話が活発に起こるような仕掛け絵本をつくること。二人の会話は煮詰まることがあるので、しまじろうパペット（写真1）をつくってほしい。

③絵本の読み聞かせの楽しさを体験させる；

昔話や世界の名作などを絵本仕立てにして絵本の読み聞かせ体験を与えるページを入れること。

④母語の土台をしっかりと築く；

幼児期初期は母語の土台を築く時期なので、生活の場面で見聞きする「オノマトペ」（擬態語や擬声語など、雨が“ザーザー”降っている、うさぎがピョンピョンはねているなど）を入れた「ことばのバスケット」（い



写真1 しまじろうパペット（指人形）

ろいろなことばに触れさせる)の頁をつくり、親子で唱えてもらうようにすること。

⑤映像演出の手法：

ビデオやDVDなどの映像教材を付録にするときの条件は、

- 1) 映像は“Simple is the best!”で、花や風船、窓の絵などを入れて画面を装飾せず、見せたいものだけをはっきりと見せ、高度な映像演出技法(画面を途中でできるカットやカットバックは使わない)。
- 2) 映像にはバック音楽は入れず、子どもにゆっくりと語りかける調子で話すこと。
- 3) 父親の育児参加を促すため、父親のような男性俳優が2歳代の子どもと運動遊びをしている場面を入れること。
- 4) ビデオは30分以上見せず、親子で共同視聴すること。
- 5) 親は子どもが画面に集中しているときには黙って見守り、子どもの集中を邪魔しないこと。

⑥子育て支援のための親向け冊子の発行：

1) 仕掛け絵本、2) 映像、3) おもちゃを連動させた「マルチおもちゃ」を親子で楽しんでもらうため、発達情報、つまり子どものこころ・からだ・あたまの発達の解説や子育ての情報を入れた親向け冊子をつくること。

⑦「学習の原理」を踏まえたマルチおもちゃの開発：

「楽しいな」「うれしいな」という快感情下で学ぶ力や情報吸収力が最大になるという学習原理を踏まえた開発をする。

★仕掛け絵本：

- 1) 手指の運動発達を促し、「心的回転能力」(頭の中で図形を回転させたり、平面から立体物を想像する能力のこと)を育てるための仕掛けやシール貼りの画面をつくる。
- 2) 実力のある絵本作家にお願いして上質な物語絵本のコーナーをつくること。絵の色彩はパステルカラーを使って、センスよく上品な色遣いで仕上げてもらいたい。

★ファシリテーターとしての

おもちゃ：

究極のおもちゃは白無垢の球、色彩と機能や動き、形を与えるのは子どもの想像力。コストがかかっても木のおもちゃを付録につけよう。12か月分のおもちゃを集めれば壮大なごっこ遊びの素材になるように、安全でセンスがよく丈夫で、なにより子どもの想像力を活性化する潜在力を備え、子どものコンピテンス(感性と理性が連携・協働する生きる力)を引き出すおもちゃを工夫すること！

マルチおもちゃは年間購読契約で各ご家庭に届けられる。「一見の客」を相手にしなくてもよいという強みがある。子どもの想像力を育てるための「ファシリテーター」(子ども

のコンピテンスを引き出すための刺激となる)としての役割を果たせるおもちゃの開発をしよう。仕掛け絵本と付録のおもちゃ、そしてビデオを連動・連携させるマルチおもちゃの開発は誰もやっていない、挑戦的で冒険に満ちた仕事になるはずだ。

⑧形成評価(モニター調査)による教材の改善:

対象年齢の高月齢(6ヵ月以上1年未満)男女と低月齢(6ヵ月未満)男女あわせて4組の母子(父子)相互作用を、マルチおもちゃが届いてすぐの遊び方を30分、2、3週間遊んだ後の遊び方を30分、父親(または母親)に撮影してもらい、その映像をモニター調査員(発達心理学研究室の博士課程の大学院生)に分析してもらう。4組4時間分を1時間分に縮約した報告ビデオを編集し、モニター調査報告会で、その編集ビデオを見ながら分析結果を報告する。

- 1) 月齢・年齢に適切であったか
- 2) 子どもが遊びに集中しているか
- 3) どのように遊んだか
- 4) 遊びこむにつれ遊びの質が向上したか
- 5) 遊び方に月齢差や男女差はあるか
- 6) どこでつまづいたか
- 7) 親の関わり方やことばかけは適切か(=子どもの主体性や内発性を尊重した関わり方やことばかけがなされているか)の7点についての報告に基づき、教材の改善提案や改善方針を話し合う。

[モニター調査の知見の蓄積]

この調査で得られた知見は「ルールブック」に記録して、編集者が交代しても、知見が伝わるようにする。

[モニター調査員の役割]

モニター調査員はマルチおもちゃを使って遊んでいる4組の親子の映像4時間分を1時間に縮約・編集し、映像分析で気づいた点や改善提案をまとめる。分析結果を監修者である筆者と編集者とが参加するモニター調査会で発表し、改善点を話し合い、次年度の開発に活かすこと。

監修を引き受けるにあたっての以上の8つの前提条件はすべて叶えられることになり、筆者は過去23年間、モニター調査を踏まえて、今日まで、時代や状況にフィットするように教材改善をしながら子どもの発達に資する教材の開発に携わってきました。

⑤子どもに支持され、親にも支持された

子育て支援の親冊子では、子どもと楽しく遊ぶことの大切さや、子どもの



写真2 しまじろう家族のパベット人形

発達をみて子どもと楽しい経験を共有することの大切さを伝えてきました。生活習慣の自立に向けて、おむつ外しや歯磨き・うがい・手洗いなどの生活習慣の自立を促すための親のはたらきかけについても具体的に提案しました。これは、子育てに迷う親たちの助けになりました。

こうして、子育て支援（写真2）も兼ねたこのマルチオモチャは子どもたちや親たちに支持されました。現在では、幼児3人に一人が母子でこのおもちゃを楽しんでくれています。マルチオモチャは日本だけではなく、韓国のソウルや中国の北京、上海、台湾の台北の子どもたちにも支持されています。2012年からは米国にも進出することになりました。

海外でも、開発したおもちゃを、形成評価し、効果を測定して改善し続けているという仕組みが評価され、安心できる上質なおもちゃとの期待をもたせる契機にもなっています。何よりも、それぞれの文化社会に生きる子どもたちが楽しく父母とコミュニケーションしながら、成長の喜びを親子で実感できるという点が、国内外で評価されたのではないかと思います。

● おわりに—子ども文化を創る営み

〈50の文字を覚えるよりも、100の

「なんだろう？」を育てたい〉〈見える力より見えない力〉、〈即効よりも底力〉を合言葉に、編集者やモニター調査員として参加してくれた発達心理学研究室の大学院生たち、皆でマルチオモチャの開発に取り組んできました。マルチオモチャの開発にあたって、筆者が編集者たちに常に言ってきたことばを本稿のしめくりにしたいと思います。

早くから文字や計算を学習させたいと思う親、つまり脇役の読者に迎合することなく、あくまでも主役の子どものころ・からだ・あたまの発達に資する最良の〈子育て支援材〉そして、ファシリテーターとしての〈マルチオモチャ〉を開発しましょう。私たちは子どもの文化を創る仕事に携わっているのです。売り上げを心配することは私たちの仕事ではありません。売り上げの心配は営業や社長に任せておけばよいのです。子どもは文化社会の宝です。その人たちの成長に私たちがいくらコストを払っても、払いすぎることはありません。その人たちの成長によってもたらされる私たちの文化社会へのギフト（賜物）は、支払ったコストを帳消しにして、余りあるものなのですから。

参考文献

- 1) 内田伸子・浜野隆（編著）：世界の子育て格差—子どもの貧困は超えられるか—，金子書房（2012）
- 2) 原 芳男：放送のための新しい幼児教育プログラムの開発，PP.27-90（1979），幼児の生活とテレビ視聴—都市高層団地における用事的生活時間を通して—，放送文化基金編
- 3) 白井常・坂元昂（編著）：テレビは用事に何ができるか—新しいテレビ番組の開発—，日本放送教育協会（1982）